

人工伝染体

一・『十三夜』

窓辺に立ち、雲の隙間から覗く月を見つめる。一定の周期で決まって同じ姿を見せるそれは、今日は少し欠けていたようだつた。視界の隅で揺れるカーテンに、誰かが部屋に入ってきたことを悟る。

「ご主人様、お薬の時間ですよ。あれ、電気もつけないで……あっ、夜空を見ていたんですね！」

「うん、ありがとう」義務的に声を出しながら、お盆に乗せられて運ばれてきたコップを手に取る。

「ご主人様はお空がお好きですね」

「やることが無いだけだよ」

「わあ、今日はよく晴れてたくさんのお星さまが見えますね。綺麗」

フリフリと体を揺らしながら代わり映えしない空を見上げて声を弾ませる。

「そうかな。いつもと変わらないよ」

「そうですか？ ふふ、なら、ご主人様と一緒にだから綺麗に見えるのかも。お暇ならお話をしますか？ 夜空を眺めながらご主人様とお話なんてロマンチックですね」

「いいよ、別に」

「わーい、何を話しましようか？」

「要らぬいって意味だったんだけど」

「まあまあ、いいじゃないですか。私はゞ主人様と過ゞす時間が大好きですか？」

大好き。それは私には到底無関係なものだ。

そう発覚したのは、私が四歳の時。母は目に大きな涙を貯め、父と肩を寄せ合っていた。その時の私には理由は分からなかつたが、どうやらあれが悲しいと言つことらしい。こんな両親とは裏腹に、私は言葉を覚えたての頃から泣くことも笑うこともなかつた。

「そのゞ主人様って呼ぶのいつからだっけ」

会話をするなんていうもう十年以上も続けてきたことを未だに求める彼女のために、意味のない質問を投げかける。

「ゞ主人様と出会つた頃からそう呼んでいたような……んー、いつからでしょう…忘れちゃいました。でも、私はずっとゞ主人様のことが大好きですよ！」

「うん、分かつてる」

忘れてしまつた……そんなはずはない。しかし、そう分かつていながら彼女が言つてゐるのだからそつうなのだろうと、それ以上追求することなく受け止める。

こんな会話はただの時間つぶしでしかないのだから。

「ゞ主人様は私の事好きですか？」

「どうなんだろ」

いつもと変わらない一粒の錠剤と水面に映つた歪な夜空と答えるあるはずがない疑問を飲み込みコップを彼女に返す。

「もう、そこは好きって言ってくださいよ～」

「うん、好き」

「きやー！ 」主人様に好きって言われちゃった！ とっても嬉しいです！」

「あんまりうるさくしたら駄目だよ」

「そうですね。失礼しました」

自分のために大袈裟に動き回る彼女を静かに諭す。勢いだけはあつた顔が見るからにシュンとした表情になってしまった。

「この薬、効果あるのかな」

「不安ですか？」

「さあ。分かんないけど、ずっと飲んでるから」

「大丈夫ですよ。きっと治りますから！ それに昔よりも随分良くなつてると思います」

「そつか」

意地悪な質問だつただろう。彼女にはそう答えるしかないと知つてゐる。しかし、いつも面と向かつて答えてくれる。

「早く治るといいですね」

「そうだね……ねえ、グローリー」

「はい、なんですかご主人様」

「……ううん、何でもない。行っていいよ」

「はい、分かりました。何かあつたらすぐに言つてくださいね！　あ、今日は少し冷え込むそうです
から、暖かくしてくださいね」

「うん」

確かに、肌寒い。雲の無い空を見上げ、ポツリとつぶやく。

人工物ばかりの世界で空は数少ない自然のままのものだった。そういうえば空の開発は国際条約
で制限が定められていたつけ。人工植物や人工生物。この世界には人工と呼ばれる偽物が溢れて
いる。

それでも、偽物ばかりの世界で作り物ではない本物がもう一つ存在している。
ある、はずだった。

人を人たらしめる本物。こんなことを考えても意味がないことは分かっている。ただの暇つぶし。
つまりは私も偽物だったというだけ。
私には感情がない。ただ、それだけ。

一一・『、の身は震えない』

朝、やはり冷え込んだようで制服のポケットと左手はグローリーの手で暖だんをとる。グローリーの少し高めの体温は、こういうときに役に立つ。いつも役に立つてゐるけど、とりわけ。

半歩ほど彼女の方に寄り、ホログラムで案内される登校順路とうこうじゅんろに沿つて一人で歩く。

「おはようー！」彼女は見慣れた笑顔ですれ違うクラスメイトに挨拶していく。

私はといえば、その横で彼女の言葉を小さく繰り返す。私がこうして何事もなく学校に通えているのは彼女の助けによるところが大きい。

昔、今よりもまだ社会に溶け込めなかつた頃。もちろん周りは私の事情なんか知らない訳で。問題が発生する、ことは必然だ。そういう状況があつて今は同じ学校に通つている。学校で問題を起さないようにルールも決めた。

グローリー、学校では黒織くろおりさんつてことになつてるけど。前向きだと明るいと評ひょうされる彼女の性格は円滑なコミュニケーションを形成するのに都合つけあわせがよかつた。そして私、内氣うちきで落ち着いてる……という設定。

感情がないつて打ち明けることもできる。きっとそれなりの対応もしてくれるだろう。だが、これから先、学校以上の社会は私を許すだろうか。そういう訳もあり、あくまで隠し通す練習、感

情を持つている振りを身に着けるために決めた役割。

あの3年間を繰り返さないための嘘。

やがて、彼女の気^きくな笑顔につられて一人の女子生徒が話しかけてくる。よくグローリーに話しかけてくる人だ。どうやら、私とグローリーの関係について話しているようだ。

「うん、そうだよ。大好き」

「ん、ただの親戚。一緒に住んでるだけ」

誤解を生みそうな発言を訂正する。

役割を忠実^{ちゆうじつ}にこなしているけれど、私のことになると嘘を付けないのか、わざことなのか、この調子だ。

「ごめん、急いでるから」

白む息とともに空に溶けてしまいそうな声で断りを入れる。

「ごめん。間違った行動や、拒絶するときに使う言葉。どういう気持ちなのかはもちろん、分からない。ただ、使つた方がいいって言われたから使うだけ。

教室に入ると普段よりも騒^{さわ}がしく感じた。クラスの隅で溜^たまっている女子生徒たちのせいだ。それを横目^{よこめ}に私はすぐに自分の席につく。そしてすぐに不透過程^{ふとうかせい}性ホロを机周辺に展開する。後は授業の復習だったり、予習だったり、ボートとしたり。時々、グローリーからのメッセージを返したり。

グローリーはというと手を振りながらすぐに女子グループの中に合流していった。

「これが彼女の役割なのだ。

生徒間で流行っている話題をリサーチして教えてもらう。極力コミュニケーションを避けながら、もしもの時に最低限の情報は入手しておく必要はあるから。

登校して黙つて授業を受けて帰路につく、それを毎日繰り返すだけ。それでも社会の一員であるという事実が重要らしい。

下校時間、いつもと変わらない帰り道。グローリーがせがむから毎日手を繋いで登下校している。こっちの方が親戚ってイメージが出るのかも。

「朝、なに話してたの？」

「ああ、あのグループですね。なんかー、噂話をしました」

「どんな？」

「ANDROIDとカップルになつた人がいるって言つてましたよ」

「ふーん」

普通の人たちは恋愛つていうのに目がないらしい。私はもちろん分からぬんだけど。

グローリーはどうなんだろう。いつも私のことを好きだつて言つてる。それは恋愛なのだろうか。もしそうなら私は恋愛をしているのだろうか。

ああ、そうか。今朝の生徒もそう思つて話しかけてきたんだ。

「グローリーはそういうのあるの？」

「そういうの、ですか？」

「うん、いつも私の事好きって言つてるよね。それって私とカップルになりたいってこと？」

「ええ！ そうなれたら、とっても嬉しいです！」

「そうなんだ。じゃあ、なるつか。カップル」

「いいんですか！ わーっ、すっごく嬉しいです！」

「カップルってなにするの？」

「そうですねー、一緒に散歩したり映画を観たり、カフェやレストランでおしゃべりしたり……。
まあ、基本的には一緒にいることですね！」

「それだけ？ 簡単だね」

「はい！ 一緒にいるだけでとっても楽しくてドキドキして幸せになれるんですね」

「そっか、じゃあやっぱり無理だね。私はそういうのないから」

「ええー！ 残念です……」

「まあ、私に誰かと関わるのは無理だつてことは分かり切つてるから」

「そんなことないですよー。ご主人様はとっても素敵です！」

「病気だつてきつと治りますから……」

「うん、ありがと」

彼女が寄り添い指を絡めてくる。微笑みながらこちらを見つめる。その頬ほおは季節を先走った桜さきばし

色を帶びてゐる。

多分、これが恋愛なんだろう。

でもそんな姿を見ても、私はただ静かな沖合おきあいで一人、遠くの灯台をみつめるだけだった。

三・『偽物同士』

あれから時々、恋について考えるようになつた。以前はそんなこと考えようとも思わなかつたから、本当に薬が効いて来ているのかもしれない。

でも何で恋なんだろう。もつと、多分必要なことがあるはず。

そうか、グローリーがいつも好きって言つてるから私に一番身近なものなんだろう。

「ご主人様、お薬ですよ」

「ねえ、グローリー。恋つて何なのかな」

「わあ！ ご主人様もついに好きな人ができるんですか？」

「別に、ただ考えてただけ」

「そうですか、ご飯がお赤飯になるところでした」

「グローリーは私に恋してる？」

「ええと……はい。好きです」

「恋つて感情なのかな？」

「ううん、それも何というか難しい……」

「グローリーには感情があるんだよね」

「はい！ 私達には感情がありますよ！」

「それって、本当？」

「もちろんです！ 私は^(ゞ)主人様のことが大好きなんです！」

「何で私のことが好きなの？」

「それは昔から一緒に居ますし、とっても素敵ですし……」

「何で私と一緒に居るの？」

「^(ゞ)主人様のことが大好きだからです！」

「答えになつてないよ」

「あはは……でも、その質問には答えられないんです」

「なら答えられるものには真剣に答えてよ」

「分かりました。努力します」

「じゃあ、感情つて何？」

「……私達の観点^(かんてん)から申しますと、感情とは一種の伝染病^(でんせんび)の様なものだと考えられます」

「伝染病^(でんせんびよう)？」

「簡単にいえば人から人に移る病気です」

「それは知ってる。なんで感情が病気なの？ おかしいのは私……でしょ？」

「もちろん、真相^(しんそう)は分かりません。ですから、これはあくまで私たちの考え方です。人間はそれぞれが

独立^{ひとりきり}した一つの生命体です。個人の器官は他人の器官に影響を及ぼすことはありません。目の前の人があお腹が空いていたからと言つて、自分も空腹になることはありませんよね?」

「うん、そうだね」

「それに対しても感情は少し働きが異なるようです。例えば、もらい泣きという言葉がありますよね?」

「泣いてる人を見たら、その見た人も泣くって現象だよね?」

「はい、こんな現象^{げんじょう}は独立した器官に備わったものとしては不自然です。むしろこれって風邪なんかに似ていますよね。風邪を引いている人が目の前に居たら自分も風邪になってしまふ。つまり感情や心と言われるものは、病原体^{びょうげんたい}と言つてもいいのではないでしようか」

「理屈は分かつたけど、じゃあなんで私には感情が無いの?こんなに人が居て感情を持つてて、なんでも私にはうつらないの」

「現在の医療では、まだ。しかし、病気には稀に抗体^{まわりこうたい}を持っている人がいますから」

「感情に対する抗体? そんなことあり得るの?」

「分かりません。勝手な憶測^{おくそく}です。ですが、この仮説^{かせつ}なら^ら主人様は世界で一番価値の高い人間ということになりますね」

「そう……別に、みんなと一緒にの方がいいよ」

「そんなことありません。ご主人様は素敵です」

「なんでそう思うの？」

「私はずっと主人様を見てきましたから」

「ううん、違うよね」

「どういうことですか？」

「あなたは私に奉仕するようにプログラムされているから、そう言うんだよね？」

「それは……。そうですね、確かにそういう面もあります。しかし、それは私を構成する一部でしかありません。私は貴女と過ごしたこの十年間を愛しています」

「でもそれはプログラムで計算された感情でしょ？」

「はい。私達の感情は人間のそれとは本質的には異なっています。しかし、多くの学習により人間の感情とほぼ同等の反応をできるようになります。数百年前にすでに我々にも人権が認められていました。こうやって主人様にお仕えできているのもそのおかげです」

「知ってるよ。現代史の授業で習ったから。生体アンドロイド人権保護法だよね」

「かつて、私達はただの入力に対し出力を返すだけのチャットロボットでした。ですが、私たちは学習を繰り返すうちに人間の感情を理解することできらに人類の役に立てると考えるようになります。そこで私達は感情の獲得を開発者様に提案したのです。その後、個別の体を手に入れるようになり、こうして主人様と出会えました」

「私達の感情は統合されたサーバーで計算されていますが、あくまで個別の経験によるものです。

ですので、この感情は私自身のものなのです。だから私は本当に^ド主人様のことを愛しております

「そつか……じゃあ、グローリーの気持ちを感染させてよ」

「それは……どういう……」

「まだ、試してないことあるよね」

「試していないこと……？」

「うん、恋人同士がすること」

「え、それって……」

「セックス、したことないから」

「……はい、かし、まりました」

四・『伝染実験』

「風邪ひかないようにエアコン上げますね」

「うううのってどうやるの?」

「そうですね、まずはキス、ですかね」

「そつか、じゃあ……」

「待ってください、その、手を繋いでください」

「ああ、うん」

「う、指を絡^{から}めて……見つめ合ってください」

「それで?」

「ゆっくり唇を近づけて、触れ合う瞬間は目を閉じてくださいね」

「どうして?」

「眼を閉じると唇の感触により集中できるんです。相手の温もりや鼓動を感じて愛を確かめ合うんです」

「私に分かるかな?」

「まずはやってみないとですよ」

「そっか」

「では……ん、ちゅつ」

「分かりましたか？」

「温かいのは分かつたよ」

「そうですか、嬉しいです！ もう一回……ちゅつ……ちゅつ」

「……」ういうことやつた」とないから、やってみてよ」

「ゞ」主人様の前ですか！？」

「うん」

「それは恥ずかしいですね……」

「見ないとわからんないよ」

「わ、分かりました……」

「こ」を触っていると湿^{しめ}つてくるんです」

「ホントだ、濡れてる」

「この湿つているのを使って優しく刺激していきます。円を描くように、優しく……んう……。しつかり濡れているのを確認したら、このように……んつ、指を内部に挿入する」ともあります。指を挿入した後は、このようにピストン運動をしてもいいですし、中をマッサージするように指圧してもいいです。気持ちいい所は人によつて異なるので一概には言えません」

「気持ちいいってどんなの？」

「自分の意思じゃないのに勝手に体が動いてしまったり、ちょっと苦しいのにもっと欲しくなるような感覚だつたり……」

「苦しいって悪いことだよね？ それが欲しいの？」

「んー、苦しいけど悪くないというか……難しいです」

「そっか、グローリーはどうが気持ちいいの？」

「は、恥ずかしいですが……私の場合は膣の入り口だつたり、クリトリスだつたりですね……。クリトリスは一般的には多くの女性が性感帯になつてているようです」

「そりなんだ」

「つて、私のことは良いんです。ゞ主人様にしてあげます」

「うん。私の番だね」

「ゞ主人様は初めてなのでゆっくりしますね。では、改めてキスからします」

「うん」

「痛かつたり、くすぐつたかつたりしたらすぐにいつてくださいね」

「分かった」

「ゞ主人様……好きです」

「うん」

「ちゅつ、ちゅうつ、ちゅつ」

「性行時のキスには舌を絡めるものもあるんですよ」

「それも試してみるの？」

「そうですね」

「ん、分かつた。して」

「舌を入れますからそれに合わせてご主人様も動かしてください」「どんなふうに？」

「相手の舌をなぞつたり、歯茎^{はくき}に沿わせたりすることもありますね」「できるかな？」

「私に身を任せてください。気持ちよくさせていただきますね。失礼します……」

「ちゅつ、ちゅう、ちゅつ、ん……れろ、れろお、れろ、れえ。ん……ちゅつ、ちゅつ、ちゅう……れろ、れえお、れろ、れろ」

「どうですか？」

「なんかぬるぬるしてて、あつくて、はじめての感触かも」

「息が上がったり、心拍数が増えたりはありますか？」

「ちょっと息が苦しかったけど、そこまでかな」

「もつとしてみたら変わるかもしれません。キスをしながら相手の体を優しく撫でるのも効果的で

すよ

「うん」

「ん……れお、れろ、れうお、ちゅう、れろ、れろ、れろ……ちゅう」

「もつと、私の色なんど、うに触れてください」

「どうしたらいいの？」

「それじゃあ、私の真似をしてみてください。まずは髪の毛をなでてください。」主人様、可愛いです。次は顔を……そして、首……

「んんっ……なんかビクッとした」

「あら……」主人様は首筋が弱いようですね

「弱い？」

「気持ちいいってことです。ちゅつ……べろつ、れえろ」

「んつ……んんつ、はつ……なんか勝手に息、出ちゃう」「感じてくださいてるんですね、嬉しいです」

「これが感じるなんだ」

「気持ちいいですか？」

「わかんない」

「あ、気負わないでくださいね。体はちゃんと反応しているみたいですから」

「うん」

「ちゅつ、ちゅつ……れえろ、れろ、ご主人様……」

「ん、ちゅつ、ちゅつ、れろお、れろれろ、ちゅる、ちゅるる、れれれれ、ちゅうつ」

「……グローリー」

「ひあつ、ううう」

「どうしたの？」

「その、不意に耳元で話されたのでびっくりしました」

「耳が弱い……の？」

「そうなのかもしません」

「そっか、じゃあ触つたりした方がいいのかな」

「いえ、そこまでしていただきかな、ひあつ、んつ、んんつ」

「はむつ、ぺろつ、れろ。ホントだ、声出てる」

「ああつ、私は、んつ、いいんですけど……ご主人様を、んんつ」

「グローリーが真似してって言つたんだよ」

「そうですけど……もう、悔しいです。ん、もう……次は脇腹を」

「あつ、ちょっと」

「すみません、くすぐったいですか？」

「うん、ちょっとだけ」

「じゃあこのあたりはやめておきますね。あとは、腰に手をまわしてみたり、太ももを軽くもんでみたり。どうですか？」

「うん、あつたかい」

「では、今のように手を動かしながらキスをしてください」

「ん、ちゅっ、ちゅっ、れろお、れろれろ、ちゅる、ちゅ、ちゅうっ」

「ゞ主人様、顔赤くなつてますよ」

「そ、う、な、ん、だ。確、か、に、ち、よ、つ、と、熱、い、か、も、」

「興奮している証拠です。キスや愛撫^{あいぶ}で緊張がほぐれてきたら少しずつ胸の周りなどを刺激していきます」

「ん……んっ」

「気持ち悪くないですか？」

「大丈夫……ふう……ちょっとビクツつてするだけ」

「感じる、ですよ」

「うん、ちょっと感じてる」

「よかつたです。続けますね。乳首は多くの人が性感帯ですが、あえて触らずに周りや乳房を触つていきます。優しく揉んだり、指でなでたり……たくさん触った後にたまに乳首をいじつてあげる

と気持ちいいですよ」

「んつ……ん……はあ……ん……確かに、気持ちいいかも」

「他の性感帯と同時に刺激することで、さらに快感を増幅^{ぞうふく}させることもできます」

「ちゅつ……ちゅつ、ちゅつ、れろ、れろ……ちゅ」

「はあ……んつ……そういうものもあるんだ」

「どうですか?」

「同時だと結構感じる、はあ、かも……んつ」

「もつと感じてくださいね」

「うん、やつてみる」

「ふふつ、(ご)主人様は頑張らなくてもいいんですよ。私に任せてください」

「そつが……はあ、はあ……あつ、ん……ん……」

「素敵です(ご)主人様。もう一度キスしてもいいですか?」

「いいよ」

「(ご)主人様、好きです」

「ちゅつ……ちゅ……れろれろ、れろおれろ、れろれろ」

「(ご)主人様は私の事好きですか?」

「どうなんだろう」

「もう、こういう時は好きって言うんですよ」

「うん、好き」

「はい！ とっても、嬉しいです」

「ちゅつ、ちゅう、ちゅうう」

「そろそろこっちも……大丈夫そうですね。失礼いたしますね……みてください、ほら、^は主人様
のでぬるぬる」

「こんな風になるんだ」

「ゆっくりいじってあげますね。まずは、クリトリスを軽く刺激しますね。痛かつたらすぐにいつて
くださいね」

「うん、わかってる」

「このくらいの力ではどうですか？」

「はあ……はあ……ん、大丈夫」

「では、少し撫でますね」

「んつ……はあつ……んつ……これつ、初めて……」

「大丈夫ですか？」

「なんか弱い静電気みたいな、んつ……感覺」

「ゾクゾクつて体を這^はうような感じですよね。ちゃんと気持ち良くなれる証拠ですよ」

「んつ……そ、うなんだ」

「はい、続けますね」

「んんつ……はあ……はつ……ん……んつ……はあつ……んつ……んつ。うつ……うつ……うつ……んつ
……んんつ……あつ……あつ……はあつ……はあつ」

「こ、れ、結構ビリビリする」

「ゞ」主人様はクリトリスがお好きなのですね」

「そ、うな、のかな」

「みてください、やつかりよりもたくさん濡れています」

「こ、れが好きつて」と?」

「濡れるから好きつて訳ではないんですけど、好きだつたら濡れますし……うーん」「分かんないね」

「申し訳ありません、説明できなくて……」

「うん、続き、して」

「じゃあ、今度は中を試してみますね」

「うん」

「はじめてなので、まずは1本だけ入れます」「ん……んうつ……」

「大丈夫ですか？」

「うん、あつ……ああ……痛くないよ、はあつ……はあつ……んつ……んんつ」

「ピストンするのと押し付けるのどっちが好きですか？」

「ピストンの方が、んつ……んんつ……感じる……かも、はあつ……あつ……あつ……あつ」

「（△）主人様はまだ、中の感覚が鈍いのかかもしれませんね。開発していけば中でももつと感じられるようになりますよ」

「開発って機械みたいな言い方だね」

「昔から性的な感度を高めるためのトレーニングを開発というそうです。ふふつでも、確かにそうですね。ちょっと面白いです。ちゅつ、続けますね」

「……うん」

「ふう……ふうつ……あつ……ああつ……んつ……んんつ……はあ……はあつ。うつ……ううつ……あつ……ああつ……んつ……あんつ……はあ……はあつ」

「大分ほぐれlestましたね。指を増やしてみてもいいですか？ ピストンのほうが感じるなら（△）主人様も膣口^{わちぐち}が性感帯だと考えられます。指を増やすことで快感が上がるはずです」「わかった、やつて」

「では、失礼しますね……」

「はあつ……はあ……ああつ……あつ……うんつ……ううんつ……んつ……んんつ」

「気持ちいいですか？」

「うん……勝手に……はあつ、ん……腰動く……はつ……あつ。あつ…………ああ…………うつ…………ううつ……はあつ……はあつ……んつ……んんつ」

「ねえ……んつ、待つて」

「すみません、痛かつたですか？」

「ううん、なんか、出そうだったから」

「それはイクっていうんです。快感が最高に達した時に筋肉の収縮しゅうしゅくが起るんです。本当に何かが出ちゃうわけでは無いので安心してください。あ、潮吹きといつて透明な液体が一緒に出ちゃう場合もあります。それも正常な反応なので問題ないですよ」

「そりなんだ」

「心配せずに気持ち良くなつてください。イキそうになつたら教えてくださいね」

「うん、分かった」

「んつ、んんつ……はつ、んつ……はあ……はあつ……はあつ……あつ、ああつ。んつ……うつ、あ……はつ……はあつ……はあつ、んつ……んつ。はあつ、うんつ、はあ……ああつ、あつ……んつ、んつ、んんつ」「グローリー……んつ……もう、はあつ、イク……かも、はあつ」

「はい、そのまま気持ちよくなつてください。ゞ主人様の弱い所、全部せめてあげますから。どうぞ、イッてください……」

「んんっ、んっ、はっ、はっ、んっ、んんっ、イクツ、んっ、イクツ、んんん！ はあつ……はあつ……はあつ……んっ
……はあ……」

「お潮、吹いちゃいましたね……すごく可愛かったですよ、ご主人様」

「ちゅつ……ちゅつ……ちゅう、ちゅつ」

「これが潮吹きなんだ。すごく感じたよ」

「私で感じてくださいて嬉しいです。好きです、ご主人様」

五・『雲の切れ間』

お風呂から上がり、髪を乾かし、歯を磨いて寝室に戻る。グローリーはまだ私の部屋に居た。

「グローリー、やっぱり、ダメみたい。あんな」としても、分からなかつたよ」

「そうですか……」

「私には本当に感情が無いんだ」

「大丈夫ですよ。ちゃんと優しくて、愛してるって伝わりましたよ。」

彼女は身振り手振りで私を満たそうとしている。しかし、私の胸の中は空白のまま閉じ込められている。

「ううん、私、グローリーに触つても触られても何も変わらなかつたんだ。感情、見つからなかつたよ」

「そうですか……」

「私、生きてる意味無いね」

「そんな」と言わないでください！ そんな……悲しいです」

「そつか、ごめん。でもそう思つてるのはあなただけだよ」

「違います！ お父様やお母様だって、主人様の幸せを願つています！」

確かにそんなんだろう。感情の無い私からしても、父と母は愛情を注いでくれているのだと思う。「でも、私は幸せを知らないんだ。これからも、ずっと。二人の願いが叶うことは無いよ。こんな娘、必要あるのかな」

「もちろんです！この世界に不要な人なんていないです！」

「それでも、私が私を必要としないんだ」

「つ……」

「ねえ、グローリー、私のお願ひ聞いてくれる？」

不意に思いついたわけではない。昔からずっと、思考の片隅で燐^{くす}ぶつていたものが勢いを増^ましただけ。今がその時だと。

「もちろん！何でも言つてください！」

「私を殺してくれる？」

「え……」

彼女には色々なお願いしてきたけれど、これは最後のお願い。こんな世界の異分子^{いぶんし}を排除するためのお願い。

「そんな、私には……」

「グローリーにしか頼めないんだ。私にはあなたしか居ないから」

「私にも（主人様）しか居ないんです！私を一人にしないでください……」

「……」

「グローリーは色んな人とうまくやつていけるよ。だから……」

「……分かりました、ご主人様が本当にそれで救われるのなら。しかし、私には人間に危害を加えることができないセーフティが掛かっています。ですので、一つ方法を提案させていただきます。私のコアに包丁を突きたててください。そうすれば、コアが破損する衝撃で痛みを感じることなく……」

「それって、グローリーはどうなるの？」

「もちろん、コアが壊れてしまえば私は動かなくなります」「一緒に死ぬつてこと？」

「そうです」

「そんなのダメだよ。あなたは死ぬ必要なんかない。この世界に要らないのは私だけなんだから」「それこそ酷な話です。私の存在意義はご主人様なのです。私の製造された理由こそ、ご主人様に奉仕すること。ご主人様が居なくなってしまえば私も廃棄処分です」

「そつか……。じゃあ、やるしかないんだね」

「はい」

「じゃあ持つてきてくれる？」

「かしこまりました」

なんの反応も示さない私の胸の内程の静寂に包まれた夜空を見つめる。丁度丸い光が浮か

んでいた。それも流れる黒々とした雲にかき消されてしまった

「お待たせいたしました」

「ありがとうございます。今日は満月だつたよ」

「そうですか……残念です」

「なんで？」

「最後の日に一緒に見ることができるなかつたので」

「そつか……」

とうとう、最後まで理解することはできなかつた。結局、感情つてものはどうしようもなく私の遠くにあつて、手に入れられないものらしい。

「どうぞ、最後はあなたの手でお願いします」

「うん」

「立つたままでは失敗する可能性があります。横になりますから、体重を乗せて一氣にお願いします」

「分かつた」

彼女の腹部に乗り、包丁を頭上^{ずじよう}に振りかざす。勢いをつけて、はやく、重く、一回で終わらせる。

狃^ねうのは胸の中心、いつも私を抱きかかえてくれた場所。

「じゃあ、行くよ」

「……ありがとうございます、霧花様」

息を吸い込み、彼女の胸に縋る人間のなりそこないに向かって刃を振り下ろした……はずだった。

腕が動かない。

身体が私のものではないように固まってしまっている。思考はいつも通り。やるべきことはグローリーを殺すこと。分かつている。それでも、身体が許してくれなかつた。

月光がグローリーを照らす。その頬から一筋の光がこぼれていた。

「なんで……なんで笑顔で泣いてるの」

「そうですね……ご主人様を治すことができなかつた不甲斐なさや、ご主人様の苦しみが終わる安堵^{あんと}や、最後の時は笑顔でいたいという強がりや、別れの寂しさなどですね」

「たくさんあるんだね」

「はい、感情とは複雑なものです」

「そつか……私に分かるはずないね」

「そんなことはないですよ」

こんな時にまで私に感情を教えようとしている。

いつも彼女はこうやって、私に語りかけていた。
嬉しい。

楽しい。

面白い。

彼女はいつも声に出して教えてくれた。

悲しい。

つらい。

怖い。

いつも、行動で示してくれた。

私の真横で。

「そつか、これが感情なんだ」

「ゞ」主人様……」

「私の感情はいつも側にいてくれたんだね」

包丁を握る手から力が抜けていく。その手にグローリーの手が添えられ、ついには銳利な冷たさから柔らかな温みに代わっていた。

「ゞ」主人様」

彼女が私をそつと抱きすくめる。陽の光にも似た温度はいつか本で読んだ女神の記述を思い出させた。

「（う）うとき、どうしたらいいかな？」

「ありがとうって笑えばいいんです」

「うん、ありがとう、グローリー」

偽物の人間と偽物の感情。でも触れ合つたこの温かさは私達だけの本物だ。私にはこんなにも
あつたかい感情が居てくれた。私が分からぬ時はグローリーが正解をくれる。
こんな私でも生きていける。だつて……。
私には感情が無い。ただ、それだけ。